

第38号 2013 Jan No.38

目次

2頁 理事長年頭のごあいさつ

3頁 NEWS & TOPICS

●JICA田中理事長ご来訪

●企業のご協力あって実現できるKITA研修

4頁 研修コース紹介

8頁 2012年度KITA研修コース一覧

9頁 海外での活動状況

●ベトナム、カザフスタン、マレーシア、フィリピン、ケニア

12頁 TOPICS

●親日国家ウズベキスタン

●助成金を頂きました



JICA理事長田中明彦氏がKITAご来訪

昨年9月、独立行政法人国際協力機構(JICA)理事長就任を機に、田中明彦氏がご来訪されました。今後の協力関係の在り方などについて意見交換し、パートナー関係をより一層深めました。
詳細は本文(3頁)をご覧ください。



平成25年度理事長方針



北九州国際技術協力協会 理事長 古野 英樹

新年あけましておめでとうございます。

昨年は欧州を起点とする世界経済の停滞感が色 濃く世界中に広まった一年でした。日本において も、閉塞感から脱しきれない状況でありました。

そのような中、KITAにおいては、7つの基本方針 に基づいて改革を一歩ずつ前進させた年でありま した。『KITAの財産は何か』と『KITAらしさ、そして 北九州に立地する強みは何か』を念頭に置きながら 基本方針を推進してきました。基本インフラの整 備、多様な人材の採用や公益法人化を起点とした透 明性の確保と情報公開は確実に進展しました。

一方、北九州市の環境を基軸とする政策、とりわ けアジア低炭素化センターの政策とのかかわりや JICAの新たな課題と方針などを踏まえたKITAの 活動を通して、地域のニーズにあった技術支援企画 をしながら創立理念の継承をしつつ質的変換も 図ってきました。環境改善、低炭素化などをテーマ にした開発途上国の発展への貢献や北九州地区な いしその近隣地区の中小企業のグローバル展開へ の手助けに結びつくコース設計、ビジネスマッチン グなどを中心にした活動であります。このように基 本の改革から質の改革への変換の年とすべく新た な基本方針をスタートさせます。

本年は7つの基本方針を踏襲し、5つの基本方針 に集約して活動します。

1. 海外ニーズ調査発掘と海外ネットワーク構築の 一層の推進

- (1) JICA·北九州市関係部局との連携による ニーズ発掘と共有化
- (2) 海外ニーズ発掘活動とその集約および計画 策定の定例化
- (3) 海外研修員ネットワーク構築 (海外人材育 成データベース活用)

2. 研修事業・技術協力事業の事業力強化・充実

- (1) KITA内部門間連携のさらなる強化
- (2) JICA·北九州市関係部局との連携体制確立
- (3) 年次事業計画の策定・実行

3. KITA経常収支の黒字体質確立

- (1) KITA収支計画精度向上と中長期見通しの 策定
- (2) KITA内事業部門別採算の確保

4. システムインフラ整備3年計画の推進

(1) 3カ年計画の実現と有効活用

5. 公益財団法人運営の定着化

(1) 透明性確保と諸情報の公開

以上、KITAのさらなる活性化と北九州ひいては 日本のステイタス向上に一層の貢献をしたいと思っ ています。

JICA理事長田中明彦氏ご来訪

昨年9月18日(火)、独立行政法人国際協力機構 (JICA)の田中理事長がKITAをご来訪されました。

今回のご来訪は、JICA理事長就任を機に、日本国内の パートナーとの関係を強化するとともに、今後の協力関係 の在り方について意見交換することを目的とし、田中理事 長と共に、JICA本部より新納国内事業部長、戸島上席秘 書官、JICA九州より村岡所長他が同行されました。

まず、KITA古野理事長より当協会の概要紹介と今後 の事業課題、上野副理事長(研修部長兼務)より今年度の 研修概要並びに研修内容の適正化の必要性、更に、工藤 副理事長より技術協力部の事業内容について説明をさ せて頂いた後、国際研修の内容の充実化のため、KITAは 今後どのような役割を果たしていくべきか、また、帰国し た研修員へのフォローアップをどのようにすべきかなどに ついて議論が交わされました。

JICA田中理事長からは、「開発途上国と言っても、一括 りではなく、また、開発のスピードも様々で、途上国の変化 も甚だしいので、JICA九州は、KITAと一緒に、各国の相

事務局事務課長 豊田 めぐみ

違や変化に合わせたプログラムを作って行きたい」とのお 言葉を頂戴しました。

今回のご来訪に際しては、島原市~福岡市~北九州市 を2日間で移動されるという強行スケジュールの中、わざ わざKITAにもお立ち寄り頂き、心から感謝申し上げます。



JICA田中理事長他 の方々と懇談する KITA幹部



両理事長の 名刺交換風景

企業のご協力あって実現できる現場第一主義のKITA研修

KITA副理事長、研修部長兼務 上野 正勝

KITAは2012年度研修コースとして、51コースが予定 されています(別稿(8頁)の「2012年度KITA研修コー ス一覧 をご参照下さい)。

その中で、研修部はJICAから受託した以下の5分野の 44研修コースを実施しており、108カ国から約430人の 参加が予定されています。5分野は、①環境管理 ②水資 源・水処理 ③生産技術・設備保全 ④省エネルギー・ 新エネルギー ⑤職業訓練・保健医療ほかです。

これらの研修はコースリーダーや講師はもちろんのこ と、見学・研修や実習を受け入れて下さっている工場や公 共機関のご協力で実施できております。この現場見学や実 習はKITA研修の目玉で、多くの研修員に驚きと感動を与 えております。そこには五感を通して体験できる真実があ り、且つ会社幹部や研修対応者の方からの示唆に富んだ情 報の発信があるからです。

あるコースの研修員(複数)から研修締めくくりの発表会 で「人生観が変わった!! 」と、発言がありました。これほどに工 場見学・研修はインパクトがあります。自国では決して経験・ 研修できないものです。貴重な時間を割いて研修に対応し て下さっている会社・機関の方々にこの紙面を借りて改め てお礼を申し上げます。

ご周知の通り、この研修は国民の貴重な税金で運用され ています。研修に携わる私たちはこの事実を忘れることな く、どうすればWin-Winの関係が達成できるかを考え続け ておりますので、どうか今後もKITAの研修に"ご理解・ご 支援を賜りますよう心からお願い申し上げます"。

今年も皆様にとって素晴らしい一年になりますようお祈 りいたします。



企業・公共機関での 研修·実習風景

KITA人事異動(2012年7月1日~2012年12月31日)

仟 新

KITA委託研修コースリーダー 大和 俊介(2012年7月1日付)

KITA委託研修事業担当(事務局兼務) 吉本 憲司(2012年10月1日付)

ますます充実する「太陽光発電エネルギー技術」コースを開講して

KITAコースリーダー 植山 高次

本コースは太陽光発電の大量導入を目指す国々の指 導的役割を担う技術行政官や電力会社の企画エンジニア を対象とする2カ月コースです。第1回を昨年2月末~ 4月実施し好評のうちに終了しました。コースの構成は 「単元1:日本の新エネ政策・施策」「単元2:太陽光発 電技術」「単元3:電力系統接続技術」の3部構成です。

本コースでは実習をふんだんに取り入れ、理解が確実 なものになる様に工夫しました。4教育機関(九大、九工 大、早稲田大、メガソーラ学院)の協力を得て実施した「太 陽光セル試作「セル特性測定」「太陽電池据え付け」「メ ガソーラ建設現場 | (右上写真) 「太陽光発電アレイメンテ ナンス」「電力系統への送電」など多方面の角度からの実 習は研修員にも好評でした。

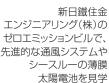
また、施設見学も充実させ、概念作りに役立つ様に配慮 しました。「アモルファスセル製造工場」「メガソーラ実証 試験プロジェクト」「ゼロエミッションビル」(右下写真)「ミ ニスマートグリッド設置ビル | など太陽光発電導入での飛 躍を目前にした日本の現状を見て貰いました。

今年2月28日~5月2日に開催予定の第2回目では、 以上に加えて、自ら仕様を決定する力をつけ企画力向上 を図るため、演習を充実させます。「日照と発電量の見積

もり演習「パワーコンディショナーシミュレーション」「太 陽電池設計演習 などです。ますます充実する本コース で、各国の太陽光発電システム普及に指導的役割を担う 技術者が巣立って行くことを期待しています。



芝浦グループ 九州ソーラファーム嘉麻 のメガソーラ建設現場で、 実機設計について受講





民生部門の省エネは世界の共通課題 ~ 「民生部門の省エネルギー推進(A) | コースを開講して ~

KITAコースリーダー 川口 健二

発展途上国における省エネ推進の支援を目的に「民生 部門の省エネルギー推進コース」を本年度(2012年度) から年2回開講することになりました。

本年度第1回は北アフリカ、中東、東南アジアの8カ国 から11名の研修員が参加して、昨年9月10日から7週間、 商業ビルや家庭の省エネ推進に関する日本の施策やそれ を実践するための空調、照明、建物などに関する基本知識 を、講義や企業訪問を通じて学びました。

国の発展レベルやエネルギー資源などの状況はそれぞ れ異なるものの、生活レベルの向上に伴って増加する民生 部門の電力消費の抑制は各国共通の課題になっており、研 修員はその国情や職務に応じた必要な知識や技術を身に つけようと、真剣に研修に取り組んでいました。彼らのアク ションプランにはその研修成果が十分に反映され、自国の エネルギー効率化をリードしようという気概を感じさせまし た。

また今回の研修を通じて、サウジアラビアやアルジェリ アの様なエネルギー資源大国においても、貴重な資源の 長期確保や、ピーク電力の抑制による電力需給バランスの 維持のために省エネの機運が高まっていることも知ること が出来、本コースの企画意図が当を得たものであることを あらためて確信することが出来ました。

今回の研修内容は概ね好評でしたが、次回以降の研修 には関係各位のご意見や研修員の感想を十分に反映させ て、より一層充実したものを目指していきたいと考えてい ます。



パナソニック(株)での 照明設備の省エネ 講義風景





アズビル(株)の 省エネビル見学を終えて

南太平洋の小さな島国のための「廃棄物管理技術(A)」コースを実施して

KITAコースリーダー 川崎 淳司

南太平洋の小さな島国と言えば、フィージー、マーシャ ル、トンガなどのビーチリゾートや常夏の自然が残る楽園 の国を想像するでしょう。最近では、地球温暖化のために 島が沈んでいるなど、興味が尽きない地域ですが、その 陰でこれら島国が抱えている問題の一つが、増え続ける 廃棄物問題です。これらの国は、日本と異なり焼却炉が無 く、全て埋立処分で大半がオープンダンプのため自然発 火や有害物を含む浸出水による環境汚染が進んでいま す。更に、小さな島国のため廃棄物埋立地の拡張にも制 約があります。

現在この地域に、JICAは廃棄物問題を解決するため 資金援助や専門家の派遣を行っていますが、それらプロ ジェクトを現地で支え、今後維持していくための人材育成 が急務となっています。そのため、その育成対象になった 人達を昨年7月から9月の2カ月間受入研修を行いまし た。廃棄物管理技術に関する参加国の強いニーズは、お 金をかけない廃棄物の減量化と安価で環境汚染が少な い埋立処分方法の導入です。そのニーズを満たすために 研修員が最も興味を持った講座は、投資額が少なく環境 に優しい準好気性埋立の福岡方式と各家庭で実施できる コンポストの導入でした。

何れの講座も研修のフィールドとしてここ北九州地域 が最適であったことから、今回の研修結果が南の島の廃 棄物問題の解決に成果を挙げてくれることを願っていま す。



「埋立処分管理理論 (福岡方式)」合同研修 福岡大学 松藤教授を囲んで~



「家庭ごみのコンポスト (高倉方式)」 ~(株)ジェイペック若松 環境研究所にて

「コンポスト事業運営 | 第1回コースを開講して

KITAコースリーダー 伊達 幸次郎

固形廃棄物の処理は各国共通の環境問題となっていま す。固形廃棄物の50~60%は生ゴミ(有機ゴミ)と言わ れており、コンポストはこの生ゴミを微生物を利用して堆肥 化し、ゴミの減少を図ると共に肥料としてリサイクル活用す る環境対応手法です。

昨年8月末から約3週間開講した本コース(第1回)の 目的は、開発途上国の研修員が北九州市や北部九州で展 開されている各種のコンポスト手法・技術および事業とし ての実態を習得し、自国でのコンポスト事業展開を促進し て貰うことです。参加国はカリブ海の島国やパレスチナなど 土地に制約のある国、焼却が規制されているフィリピン、埋 立場の残寿命に問題のあるバングラディシュやベトナムな ど10名が参加しました。

コンポストの手法として、高倉方式(北九州市/(株)ジェ イペック)やEMボカシ法(佐世保市/大地といのちの会)、 また身近な段ボールコンポストなどや、更に規模があり、事 業として展開しているウィンドロー式(伊万里市/はちがめ プラン)や電動式(北九州市/楽しい(株)、JA小倉有機セン ター)などの研修先の講師から熱心で実践的な指導を受 け、コンポスト技術の理解や事業化への確信を深めたと思 われます。

加えてコンポスト事業を普及するには、まずゴミの分別が 必要ですが、伊万里市や福岡県大木町、北九州市など一般 市民の人達が当然の如く分別・管理している姿に強い感 銘を覚えたようです。

これらの研修の成果として、研修員が自国のコンポスト事 業の普及・発展に寄与することを願っています。



佐世保市大地と いのちの会での EMボカシ法研修の一コマ



伊万里市はちがめプラン および地域の人々と共に ゴミ集積場での一コマ

池田小学校、黒川香月ほたるを守る会の皆さんに感謝!! ~「水環境行政(A)」第1回コースを開講して ~

KITAコースリーダー 植山 高次

2012年度新設の本コースは昨年7月5日から2週 間余り開催され、4カ国(フィリピン、ネパール、クック諸 島、モーリシャス)から6名が参加しました。短い期間なの で、浄化槽の普及に焦点を置いた内容としましたが、研修 員の二一ズに合致しており非常に好評でした。

この中で、研修員に大きな感動を与えたのが、研修コー ス最初の「小学校における環境教育」です。北九州市八幡 西区の市街地を流れる黒川のほたるが棲む水環境維持 活動の紹介です。

北九州市立池田小学校の児童から「ほたる飼育の大変 さや水質保全の重要性について一の発表、香月黒川ほたる を守る会(まちづくり支援ボランティア団体)の岩本会長か ら「同会の活動内容」の解説を受けました。同小学校では、 ほたる祭りが開催される6月頃にほたるを捕獲し、その卵 を孵化させ成虫にしてから黒川に放しています。ほたるの 幼虫は川二ナの幼虫を食べるので、これも同時に飼育して いるのですが、ほたるの飼育より大変だそうです。

ほたる飼育室を見学後、美しく維持されている黒川やま す渕ダムを見学しました。また、黒川の畔で同会長が営む お店であんこもちを振る舞われ研修員は大満足でした。

本コースは池田小学校での素晴らしい体験でスタート

し良いムードのまま終了しました。研修員が発表したアク ションプランも良い出来との評判でした。ご協力頂いた上 枡校長、楫山教頭、坂本教務主任をはじめ池田小学校の 皆様、守る会の岩本会長、田代事務局長、鶴田会計担当各 位に深く感謝致します。



市立池田小学校では 「ほたるを守る会」の 活動紹介の後、児童の 皆さんからほたる飼育 についての発表を聞く



香月黒川ほたるを守る会 役員の方々のご案内で 黒川の美しい流れを見学

「アフリカ地域 実践的電気・電子技術者育成」第1回コース開講 ~ 教育と現場技術の格差解消を目指して ~

KITAコースリーダー 久良 修郭

本研修コース(第1回)は、アフリカ地域の職業訓練学 校、工業高等学校などで、電気・電子分野での職業教育に 携わっている先生方を対象とし、昨年7月より2カ月間開 講しました。参加者は、エジプト、ケニア、スワジランド、ウガ ンダ国より各1名の計4名でした。

本コースでは、学校における職業教育をどのように行っ ていけば効果的に学生の育成ができるかに対するヒント を、研修参加者一人一人に掴み取って貰えるように研修内 容を吟味し、用意しました。すなわち、実学つまり工場現場 での作業にかかわる知識を参加の先生方に修得して貰う ため、具体的に企業で行われている技術者教育・訓練の 場を体験して貰いました。例えば、モーターで駆動されて いる機械のトラブルについて研修員一人一人が解決に取 り組みました。これらは理論のみの座学ではほとんど経験 することが困難な内容です。

また、我が国における電気及び電気・電子製品の安全・ 安心に対する国民の信頼感を得ることに大いに役立って いる、国家的な電気技術者資格制度の概要を講義に組み 込み、社会的に「電気及び電気・電子製品に対する安全・ 安心 | を保証している仕組みも紹介しました。

短い研修期間のため、本研修で取り上げたテーマ・分

野は非常に限られてはいますが、取り扱っている内容から、 その広がりを考えることにより、今後の学校における教育・ 訓練の場でも大いに活用できるものになったと確信してい ます。実際、研修員からもその様な評価を頂きました。



直流電源の製作実習 において負荷試験の 説明を受ける研修員



各自毎に準備された モーターを使用した 動作やトラブル診断など

「中南米地域 プロセス工業におけるクリーナープロダクション」コースを実施して

KITAコースリーダー 安部 哲夫

本コースは、中南米の技術者、管理者を対象に、昨年8月下旬から11月下旬にかけて実施した講座です。当初、南アメリカの5カ国を対象として2005年度にスタートしたこのコースは、2008年度から2010年度までの3年間は対象国を中南米の10カ国に拡大し、1年に2回開催されてきました。その後、2011年から再び1回/年の開催となり、今回は通算11回目の開催でした。アルゼンチン、ボリビア、チリ、エクアドル、エルサルバドル、ニカラグアの中南米6カ国から7名の研修員が参加しました。研修コースの内容は、クリーナープロダクション実施に必要な技術、手法を習得し、日本企業での具体的な適用事例を学び、研修員が抱える課題の解決策を立案し、アクションプランにまとめることです。自国へ帰国後、このプランを実施することで具体的な成果を得ることができるはずです。

今回の研修員は、製造業の管理者が3名、地域の中小企業を技術的に支援・指導する管理者、技術者が4名であり、その業種や専門技術、知識なども多様でしたが、全員大変熱心にすべての講義、演習、企業研修に取り組み、講師への質問も多く、活気あふれた研修になりました。アクションプラン作成に向けた活動も極めて積極的で、帰国後、アクションプランを実施するとともに、本研修コースで

取得した知識、技術を日常の業務に活用することで、大きな成果をあげることができるだろうと確信しています。



JICA九州国際センター講義室での「QC7つ道具の演習」風景



リサイクル工場((株)新菱二島工場)での研修風景

「中南米地域 生産性向上活動普及(ボランティア連携)」コースを終了して

KITAコースリーダー 河崎 克彦

本コースは南米地域、カリブ海周辺地域の製造業において中小企業のカイゼン、5S*などの生産性向上活動を指導している要員の強化、拡大を目的とした講座です。また現地で生産性向上活動を指導しているシニアボランティアとの協同活動力を強化する研修でもあります。3年前より開始して本年度(2012年度)で4年目となります。本年度はメキシコ、ドミニカ、ホンジュラス、コロンビア、パラグアイから計8名の研修員が参加しました。

研修内容は生産管理、品質管理、生産技術が中心です。いろいろな管理手法を言葉として知っていても、実際にどのように運用したら良いかよく分からないのが実態の様です。企業研修で実際に日本の現場でそれがどのように使われ、運用されているかを調査するため中小企業を訪問しました。日本における5S活動を始めとした自主改善活動、情報のオープン化、共有化、トップとワーカーのコミュニケーション、さらにはワーカーのレベルの高さに感心していました。日本の生産性向上の基本を感じたようです。また皆元気で陽気で質問も多く、楽しく研修することができました。一番力を入れたのは自国で中小企業の指導にあたって改善計画の立案が必要であり、その事例として各自のアクションプランの作成です。何度も何度も修

正を重ね、やっとQCストーリーに沿ったものが完成しました。これが皆の一番の達成感の様でした。

この地域は日本とは労働習慣、カルチャーが違い、日本 方式がそのまま適用できると思いませんが、諦めず、各国 流、各組織流にアレンジして、応用、適用して貰って、是非、 生産性向上活動を拡大、展開して欲しいと願っています。

*5S: 整理、整頓、清掃、清潔、躾



(株)村上精機工作所の5Sリーダーとの5S意見交換会後の一コマ

2012年度KITA研修コース一覧(実績/予定)

2012.12.01 現在

JICA 国別研修 KITA 個別研修 JICA 集団研修 JICA 地域別研修 KITAコースリーダー/ (アシスタントコースリーダ-受託先機関など KITA研修期間(月/日) 研修コース名 JICA 川崎 / (塚本) 2013.1/21~4/26 10 産業環境対策 JICA 9 市民参加型廃棄物管理研修 原口 9/12~11/2 JICA 10/17~11/30 10 貴戸 大気汚染源管理 廃棄物管理技術 (A) JICA 川崎/(塚本) 7/25~9/21 8 7 廃棄物管理技術 (B) JICA 川合 10/24~12/21 環境管理 JICA 城戸 2013.2/19~4/19 6 ベトナム 廃棄物管理技術(C) 低炭素化のための環境技術 JICA 矢頭 9/26~10/24 12 JICA 伊達 8/28~9/13 10 コンポスト事業運営 10/15~10/20 15 韓国 環境・省エネルギー経営者セミナー 日韓産業技術協力財団 金子(敏) 7 産業廃水処理技術(A) JICA 荒川 8/1~11/22 ベトナム 産業廃水処理技術(B) JICA 荒川 2013.2/27~4/26 6 7 JICA 米澤 8/23~11/30 生活排水対策 JICA 10 水資源、水処理 下水道維持管理システムと排水処理技術 B 末田 2013.1/16~3/8 7/6~7/20 6 水環境行政(A) JICA 植山 水環境行政 JICA 矢頭 2013.2/26~3/8 10 ベトナム 下水道経営 JICA 矢頭 2013.1/6~1/19 10 宮本正/(河崎) 7 JICA 10/22~2/8 南米地域 生産性向上実践技術 生産性向上のための保全管理(生産保全によるクリーナープロダクション) JICA 石川 9/4~11/6 7 JICA 2013. 1/10~5/3 メカトロニクス·ロボット実践技術 谷口 8 7 安部/(福森) JICA 8/23~11/21 中南米地域 プロセス工業におけるCP JICA 6/11~7/20 中南米地域 生産性向上活動普及(ボランティア連携) 訓底 10 牛産技術、設備保全 非破壊検査を中心としたライフライン施設の保全管理技術 JICA 外山 2013.2/18~6/7 11 ベトナム 生産性向上のための実践的経営管理 A JICA 宮本 7/23~8/3 6 7 9/24~10/5 ベトナム 生産性向上のための実践的経営管理 B JICA 宮本 南東欧地域 クリーナープロダクション振興 JICA 小杉/(上野) 9/17~10/27 8 インドネシア 自動車部品製造業競争力強化セミナー JICE/経済産業省 北田 10/29~11/3 20 JICA(草の根) ベトナムハイフォン市 製造業の工場管理力向上プログラム 藤本 7/22~8/10 4 __ 川口/(植山) インド 省エネルギー 技術(1) 15 JICA 6/28~8/3 インド 省エネルギー 技術(2) JICA 植山 2013. 1/17~2/22 15 インド 中小企業の省エネルギー技術 JICA 11/21~12/12 15 大和 11 省エネルギー技術と設備診断 JICA 植山/(尾野) 8/13~11/20 省エネルギー政策立案(B) JICA 川口/(植山) 11/19~12/19 16 省エネルギー、 新エネルギー 太陽光発電エネルギー技術(B) JICA 植山 2013. 2/28~5/2 16 アジア·南東欧 低炭素化社会実現のための発電技術(A) JICA 矢頭/(上野) 8/3~8/31 8 . IICA 11/9~12/7 7 ニカラグア 低炭素化社会実現のための発電技術 (B) 藤井/(上野) 大洋州、カリブ、アフリカ 低炭素化社会実現のための発電技術 (C) JICA 金子(敏)/(矢頭) 2013. 2/15~3/15 10 民生部門の省エネ推進(A) JICA 川口 9/10~10/25 11 民生部門の省エネ推進 (B) JICA ||||2013. 2/4~3/21 11 三木 2013. 1/27~2/23 中南米地域。産業と連携した職業訓練 . IICA 16 勤労者のための産業保健と予防医療 JICA 高橋 9/3~12/14 8 JICA 2013. 1/14~3/9 12 食品衛生のための行政強化(食品保健行政) 中原 7/31~8/24 17 JICA 中南米地域中小企業·地場産業活性化 三木 職業訓練、 アフリカ地域 実践的電気・電子技術者育成 保健医療 JICA 久良 7/24~9/21 4 -教育と現場技術の格差解消を目指して-中小企業支援ほか 日系地域活性化研修 JICA 二木 9/6~9/25 6 アフリカ地域 起業家育成・中小零細企業活性化(A) JICA 二木 10/2~10/26 15 アフリカ地域 起業家育成・中小零細企業活性化(B) JICA 三木 11/18~12/15 15 環境教育 JICA 川崎 10/31~11/30 12 中国·昆明市 水環境改善研修 中国·昆明市 鶴田 2013.2/10~2/15 6 自治体職員協力交流事業研修(CLAIR研修) 6/1~12/25 北九州市 金子(滋) 4 アジアの環境 人材育成 マレーシア 廃棄物管理業務の効率化事業本邦研修 北九州市 森本 10/8~10/20 5 インドネシア・スラバヤ市 分散型排水処理施設整備事業受入研修 JICA 原口 10/15~11/3 6

●なお、研修コースの詳細、年間スケジュールは KITAのホームページ(http://www.kita.or.jp/)でもご覧になれます。

JICA草の根技術協力事業「ベトナム・ハイフォン市における製造業の工場管理力向上プロジェクト」について

技術協力部長 藤本 研一

本プロジェクトの目標は、ハイフォン市製造業の製造技術力と工場管理力の底上げです。具体的には(1)人材育成、(2)地場中小企業育成の二つのテーマから構成されています。(1)はハイフォン工業職短期大学(HPIVC)の教員を対象にした「生産マネージメント」に関する研修です。(2)は製造業者が抱える技術課題の解決プログラムを提案することです。

(1)について、昨年7月23日より3週間、JICA九州国際センターで研修を行いました。研修員はHPIVCの教員3名とハイフォン市商工局職員1名でした。生産性向上、品質管理、5S*などの講義に加え、企業7社を見学しました。研修の成果は早速HPIVCで活かされ、学生に対する生産マネージメントの講義はこれまでの機械科、電気科を対象にした選択科目から全学科の学生を対象にした必須科目に格上げされました。更に、企業の若手技術者を対象にした講義も今年から始まる予定です。

(2)については、今年度から合理的会社運営に不可欠な5Sの導入を指導しました。9月には現地を訪問し、以前5S導入を指導した企業へのフォローアップを行いました。5S活動は活発で、写真の様に、啓蒙掲示板が工場内各所にあり、工場内は見違えるほど綺麗になっていました。ま

た、新たな企業5社に5S導入手法を指導しました。各社とも、幹部が5S導入に積極的でしたので、次回(今年1月)訪問時、進捗状況を視察することが楽しみです。

*5S: 整理、整頓、清掃、清潔、躾



今後5Sの導入を計画している 雑然とした典型的な ベトナムの工場



整理整頓された5S導入後の工場と5Sの掲示板

北九州ーベトナム・ハノイ、ハイフォン地域間の技術・経済交流を支援

技術協力部 宮田 利勝、齋藤 導宣

北九州市では、日本貿易振興機構(JETRO)の地域間交流支援(RIT)事業プログラムを活用して、北九州地域ーベトナム・ハノイ、ハイフォン地域間での金属加工・機械製造分野において、技術・経済交流を促進する事業が実施されています。KITAはこの中で調査、アドバイスなどの支援業務を担当しています。

本事業は2010年度の事前調査段階からKITAは両地域での企業発掘や企業間交流の支援を行ってきました。これまでに集塵設備の製造委託、バルブ部材の試験購入、共同事業展開のための覚書締結など多くの成果が生まれています。

2012年度は、7月に新しいパートナー企業を求めて現地11社の訪問調査を行い、併せてベトナム鉄鋼業の近代化に北九州企業が担える部分はないかとベトナム鉄鋼協会を訪問しました。そして、11月には北九州企業ミッション(8社)とともに訪越。ハノイ市ではVIETWATER2012*の北九州市展示ブース内での商談会とベトナム鉄鋼協会での技術セミナーを、ハイフォン市では技術セミナーと商談会を開催し、活発な技術討議と多彩な企業面談が行われました。特にこの技術セミナーでは電炉工場での省エネ技術が、商談会ではバイオトイレ製造や販売などいくつかの

有望案件が活発にそして熱く話し合われました。

KITAでは今後これら商談の具体化を支援して行くとともに、両地域間での更なる技術・経済交流の拡大に努めて参ります。

*VIETWATER2012: ベトナム最大の水ビジネス関連の展示会で今回はハ ノイ市で開催された。



VIETWATER2012 北九州市展示ブースでの 商談風景

ハイフォン市での 商談会風景/ 現地テレビ局の 取材を受ける

カザフスタン・アルセロールミタル製鉄所(AMK)との技術交流について

KITA副理事長 工藤 和也

昨年6月18日から3日間、筆者は2012年度JETRO・ RIT*事業ミッションの団長として、中央アジアのカザフスタ ン共和国にあるアルセロールミタル・カザフスタン製鉄所 を訪問しました。同所の操業開始は1960年で、1995年 にはアルセロールミタルが買収しました。製鉄所のある町テ ミルタウは鉄の町で、人口は18万人、製鉄所従業員数は4 万人で家族を含めると地域住民は製鉄所と何らかの関係が あります。

製鉄所の特徴は、ブリキや亜鉛メッキ鋼板など比較的高 品質な薄板製品と棒鋼、形鋼など幅広い鉄鋼製品を製造 していることです。同所では、SOx、NOxなど環境問題が 極めて深刻で年間 1,800万ドルの環境賦課金を払ってい ます。また省エネ設備の普及が遅れており、改善の余地が 非常に大きい状況です。

今後、環境対策と大型省エネ設備の導入のため、相当額 の設備投資が必要と考えられています。代表例として、環 境対策では焼結工場の排煙脱硫設備、省エネ設備では コークス乾式消火設備、高炉ガス回収設備、転炉ガス回収 設備などです。スラグ処理では、設備改造によって転炉で 使用するスクラップ代替として付加価値を高めて鉄分を回 収できる様になります。また、現在の同製鉄所のスラグ処

理設備は非効率で改善方法を提案する計画です。

次回のミッションは2012年11月の予定で、不定形耐 火物、高炉送風羽口、転炉酸素吹込み用ランス・ノズル、 長寿命CPCロールなどのPRを行い、製鋼スラグ処理に 関してはスラグ処理設備の具体的増強策も提案し、北九 州企業の技術移転に結び付けたいと願っています。

*JETRO·RIT: JETRO Regional Industry Tie-Up、JETRO地域間交流支援事業



カザフスタン・ アルセロールミタル 製鉄所第4高炉



同製鉄所高炉鋳床と 出銑作業風景

マレーシア国における廃棄物管理業務の効率化事業(第2回本邦研修)について

北九州市環境局環境国際戦略課 森本 美鈴

JICA草の根事業を活用して北九州市が推進している 「マレーシア国における廃棄物管理業務の効率化事業」 (2011~2012年度)の第2年次本邦研修が、2012 年10月9日から18日まで行われました。

研修に参加したのは、本事業のカウンターパートである マレーシア国固形廃棄物管理公社(PPSPPA)幹部職員 の 15名です。

2週間の研修では、市内外の廃棄物資源化施設や工場 などを見学しました。また、そのうち3日間を①浸出水分 析班②生ごみ堆肥化技術班、の2班に分かれて実習を行 い、私は後者の班にアテンドしました。

(株)ジェイペック若松環境研究所業務推進役の高倉弘 二氏及び同所の八百屋さやか氏の師事を受け、森の中に コンポストのシードとなる放線菌類を採取に出かけ、それ らを発酵食品と混ぜてシードコンポストを作り、その長期 維持管理などのノウハウまで学びました。

この講座の中で高倉氏及び八百屋氏は、生ごみコンポ ストの科学的な仕組みや、土づくりの重要性を解き明か す手法として、指示薬や、百円ショップで入手できる簡単 な文具や紙などで作った、カラフルでビジュアルな模型 様の教材を駆使して説明し、研修生に大好評でした。

「科学的である|「楽しい!!」、これらは技術や知識を伝 えるための原点とも言え、研修生は啓発のための環境教 育についても学ぶことができたと言えます。

今後も、コミュニティレベルの、誰もが関心を持つ啓発 を進めて欲しいと思います。



カラーボールを使って 土中の成分を表す模型 を使った講義



研修員の皆さんと (株)ジェイペック 高倉弘二講師、 八百屋さやか講師



フィリピン・メトロセブ地域における廃棄物管理手法の確立について

KITA環境協力センター課長 永石 昌也

2010年度より地球環境基金の助成を受け、㈱ジェイ ペック若松環境研究所、(公財)地球環境戦略研究機関と 共同実施してきましたが、本年度(2012年度)が最終年 度となります。

ごみの組成の50%以上を生ごみが占める現地の実情 に合わせた廃棄物管理手法として、高倉式コンポストの推 進と資源化物リサイクルを組み合わせた廃棄物管理方法 (KitaQ方式)を推進してきました。

現在、セブ市ではコミュニティにおける家庭用コンポスト の普及、市場ごみ等の処理を視野に入れたコンポストセン ターの設置・運営を進めています。また、いくつかの企業・ 大学等で、生ごみ発生源での高倉式コンポストによる堆肥 化を行い、ごみ減量化に取り組んでいます(指導は、現地 NGO; CUSW (Cebu Uniting for Sustainable Water)が中心になって実施)。

コンポスト技術移転等の結果、高倉式コンポストによる 大規模処理(tレベル)に取り組む企業が出てきたり、ショッ ピングセンターから排出されるごみを対象に、生ごみ堆肥 化とプラスチック等資源化物のリサイクルを組み合わせた KitaQ方式による廃棄物管理をビジネスとして行う会社 が設立されたりしています。

また、メトロセブ地域内の隣接都市マンダウエ市、タリサ イ市へセミナー等をとおして技術移転に着手しています。 これらのケーススタディのとりまとめを行っており、 2012年12月にセブ市において総括セミナーを実施す る予定です。



マンダウエ市における コンポストヤミナー



セブ市集中処理型 コンポストセンター におけるセミナ

ケニア国ナイロビ市廃棄物管理能力向上プロジェクトについて

KITA環境協力センター環境専門員 貴戸 東

ケニア国の首都ナイロビ市では、2008年に「Vision 2030 | の国家開発計画を発表し、2030年までに高い 生活水準、国際的な競争力及び経済的繁栄の達成の実現 を目指していますが、同市では廃棄物管理体制が十分で はなく、特に低所得者居住地域で収集運搬が十分出来て いない(同市全体の予想総排出量の約33%のみが収集 されている程度)ことから、都市衛生上の大きな問題と なっています。

本プロジェクトは、同市のこのような問題を改善するため、 廃棄物管理に関する組織の再編や収集・運搬能力向上など を目的として2012年度からJICAが実施しているものです。 プロジェクトは、(株)建設技研インターナショナルの統括の もと、KITA、(株)エックス都市研究所が共同企業体(JV)を 組み、これを北九州市、IGES*などが支援する体制です。

ナイロビ市の一般廃棄物は、高所得者住宅では個別契 約による収集業者、低所得者住宅では環境局や同局から 委託された業者が、別々に収集・運搬を行っていること から、収集・運搬効率が極めて悪いのが現状です。また、 収集・運搬された廃棄物は、埋め立て処分場において処 分されていますが、その環境も劣悪であり、このことも収 集効率が向上できない原因となっています。

当JVの収集・運搬能力向上支援チームでは、運搬効 率の向上を目的として、2013年度からフランチャイズ 制導入のためのパイロットプロジェクトを実施するための 準備を行っています。

> *IGES: Institute for Global Environmental Strategies. 公益財団法人 地球環境戦略研究機関



ナイロビ市内の事業者 による廃棄物収集風景

ナイロビ市の廃棄物



TOPICS:

ウズベキスタンの親日感情の背景と今後の技術協力の可能性

KITA副理事長 工藤 和也

者は昨年JETRO(日本貿易振興機構)の仕事で、ウズベキスタン 共和国の首都タシケントを訪問する機会に恵まれました。タシケン トはシルクロードのオアシスとして中央アジアとヨーロッパを結ぶ中継基 地でした。市内を歩くと、日本人によく似た容姿の人達を見かけます。

同国には、第二次世界大戦後旧ソ連によって抑留され、シベリアから強 制的に移送された日本人が建設に参加した建造物があり、現在もなお使 用されています。このことは、日本の技術の高さと勤勉さを示すもので、ウ ズベキスタンの人たちは、今も日本人に畏敬の念を抱いています。これら 建物の一つに、有名な"ナヴォイ劇場"があります。劇場内の壁には、「この 劇場は極東から強制移住させられた日本人によって建てられました」と、ウ ズベキスタン語、ロシア語、英語記載と共に日本語でも記された顕彰碑が 掲げられています。劇場建設に際してソ連兵の監視下で、ろくに食料も与 えられず、飢えと寒さのために多くの日本人が命を落としました。見るに見 かねた現地の人たちは、夜にこっそり食料や毛布を差し入れてくれ、その お陰で多くの日本人の命が救われたそうです。

また、右下の写真は、ソ連崩壊後にカリモフ同国大統領の指揮のもとで 建設・整備された日本人慰霊のための公園墓地です。周囲には日本から 寄贈された沢山の桜の木が植えられ、春になると美しい花を咲かせている そうです。また、公園墓地では365日墓地を管理するウズベキスタン人の墓守が毎日墓を清めてくれています。



ウズベキスタン共和国首都タシケントにあるナヴォイ劇場



ウズベキスタン共和国首都タシケントにある日本人墓地

今でも若いお母さんは、自分の子供に「日本人のようになりなさい」と言って子供を厳しくかつ優しく躾けています。当 時の日本人は厳しい環境下でも真面目に立派な仕事を成し遂げ、現地の人たちに強い印象を残しました。このことは母 から子供へと語り継がれています。

今もウズベキスタンは世界で最も親日的な国家です。

昨今の複雑な世界情勢の中にあって、このような親日国家もあることには心の安らぎを覚えます。今我々は、国家の あり方と他国との付き合い方を問われています。ウズベキスタンのような国に対しては手厚い協力をしたいと強い思い に駆られて帰国しました。

KITA支援団体からKITAへ助成金を頂きました

012年10月、(公財)吉川育英会(理 事長吉川卓志様)より、KITAが研修 員向けに作成・配布している英文生活情報 誌「Let's Enjoy Kitakyushu! |の助成に 10万円を、また、同月、国際ソロプチミスト北 九州(会長林田法恵様)より、国際親善秋季バ スハイクの助成に10万円を頂きました。

ご厚意に心より感謝申し上げます。



[Let's Enjoy Kitakyushu!]

国際親善秋季バスハイクにて



KITAニュース No.38 (第38号) 2013年1月1日発行(1月・7月発行)

発行:公益財団法人北九州国際技術協力協会編集発行人:事務局長 藤原 直捷

〒805-0062 北九州市八幡東区平野一丁目1番1号 国際村交流センター4階

TEL: 093-662-7171 FAX: 093-662-7177

E-mail: info@kita.or.jp

●右記Web site(KITAホームページ)には、KITAのご案内、活動、過去の KITAニュースなどを掲載していますのでご覧下さい。

